

32 ほかにふたりの犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために、引かれて行った。

33 「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとは右に、ひとは左に。

34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

35 民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」

36 兵士たちもイエスをあざけり、そばに寄って来て、酸いぶどう酒を差し出し、

37 「ユダヤ人の王なら、自分を救え」と言った。

38 「これはユダヤ人の王」と書いた札もイエスの頭上に掲げてあった。

39 十字架にかけられていた犯罪人のひとはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言った。

40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。

41 われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」

42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」

43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

今日はルカの福音書 23 章、32 節～43 節をお読みいただきました。

この所から、「三つの十字架」と題して、恵みを分かち合いたいと思います。

十字架の受難週がまもなく近づいて来ておりまして、十字架のことを少し気に掛けるようなそういう時期になって来ました。

十字架——十字架のアクセサリーをよくしていますね、いろんな方がね。すごくこう、なんかこう座りの良いデザインなんではないでしょうか。

十字架のアクセサリー、ティファニーのクロス、ダイヤモンドが入っている、こんな小さいんですけども、40万円するんですよ（大笑）。

何かポロッと落としたら失くしそうな小さなものなんですけれども、40万円。

でもこの十字架——これはかつてのローマ帝国が、犯罪者を処刑するために用いていた方法の中で、最も残酷だった刑——これが十字架の刑でわけです。

つまり死刑道具だったわけですね。

その死刑道具が、救いのシンボルになっているわけです。

この十字架（と正面の十字架を半身振り向いて、右手で指さして）、死刑道具がここに掲げられている。

教会の塔の上にも、死刑道具が掲げられている（笑）。

単なるデザインじゃないんですね。

私たちの罪のために死んでくださった救い主イエスさまのしるしであり、それほどまで私たちを愛してくださった愛のしるしなんです。

聖なる神さまのレベルには到底届くことができない私たちなんですけれども、イエスさまの十字架によって、「救いは完了した」とイエスさまは宣言されて、ふさわしくない私たちが神さまの子どもとして、救いの恵みの中を歩ませていただくことができる——これがイエスさまの十字架なんですね。

しかし、イエスさまが十字架にかけられていたこの金曜日、どくろの丘の上に立てられた十字架はひとつだけではありませんでした。

32節、33節をご覧くださいますと——

32 ほかにふたりの犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために、引かれて行った。

33 「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとは右に、ひとは左に。

イエスさまとともに死刑にされる、ふたりの犯罪人がいました。

1) で、先ずその内の、一つ目の十字架にかけられた犯罪人を見て行きたいと思います。

39節を見ていただきますと——

39 十字架にかけられていた犯罪人のひとはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言った。

と書いてあります。イエスさまに向かって悪口（あくこう）——何で悪口って、わざわざ難しい言葉にしたんでしょうねえ。悪口ですよ。早い話がわるくちですよ。

悪口を言った、イエスさまに。

「あなたはキリストではないか。自分を救え。キリストであることを証明しろ。そして私たちを救え。十字架の苦しみから解放されたいんだ」

この犯罪人はなぜこのようなことを言ったのか？

私（戸塚師）は想像するに、指導者や兵士たちのイエスさまへのあざけりを聞いていたのかもしれませんが。

その前に、35節と36節をご覧いただきたいと思いますが——

35 民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」

36 兵士たちもイエスをあざけり、そばに寄って来て、酸いぶどう酒を差し出し、

37 「ユダヤ人の王なら、自分を救え」と言った。

指導者たちの台詞の中に、「あれは他人を救った」そして「自分を救ってみろ」（35節）

兵士たちの台詞の中に、37節に、「ユダヤ人の王なら、自分を救え」

これを聞いていたから、十字架の犯罪人のひとりは、

「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」（39節）と、恐らく（指導者たち・兵士たちと）同じ思いになって言ったのではないかと想像いたします。

「他人を救った。自分を救え」この39節の犯罪人の言葉ですけれども、他の訳の聖書では、こうあります。

<口語訳聖書>では——

十字架にかけられた犯罪人のひとりが、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」と、イエスに悪口（わるくち）を言いつづけた。

※「悪口を言い続けた」——1回や2回ではなかったらしいです。

<新共同訳聖書>では——

十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシア

ではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」

※「ののしった」と書いてあります。

<文語訳聖書>では――

十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて（そしりて）言ふ『なんぢはキリストならずや、己と我らとを救へ』

※「悪人の一人」――悪人という風に書かれています。

<リビングバイブル>ではこうあります。

イエスの横で十字架につけられていた犯罪人の一人までが、「あんたはメシアさまなんだってなあ。だったらよお、自分と俺たちを救ってもよさそうなもんだぜ。え、どうなんだい」（笑）とののしりました。

※実際はこんな元気な言葉を発することはできなかったでしょうね。

極限の苦しみと痛みの中で、息も絶え絶えに言った言葉なのでしょう。

それはイエスさまも、もう一人の犯罪人も同じでした。

この一つ目の十字架にかけられた犯罪人は、悔い改めることもなく、十字架の上でそのまま死んでいったのでしょう。

死んだとは書いてないんですが、恐らくそうでしょうね、死刑ですから。死んでいったのだと思います。

2) 二つ目の十字架にかけられた、もう一人の犯罪人を見たいと思います。40節です。

40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。……

「おまえは神をも恐れないのか」――これはどういう意味か？

「そんな言い方をすると、おまえは神がどのような方か、わからないのか？」という意味だと思うんですね。

「おまえは神をも恐れないのか」――この言葉の中に、「俺は神を恐れる」「俺は神を信じようと思う」という気持ちが入っていたのではないだろうかと思うんです。

「おまえは神をも恐れないのか」（40節）そしてその続き、

「おまえも同じ刑罰を受けているではないか。」（同）――これは、「おまえもおれと同じような極悪犯罪人で、十字架刑を受けているんだよ。もうどうしよう

もないんだ」というような思いだったと思うんですね。
そして 41 節に続きます。

41 われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」

「この方」という風にこの犯罪人は言っています。「この方は」——もうひとりの犯罪人は、真ん中の十字架にかけられている男が、「この方」と言えるような人物ではないだろうか？と感じ始めている。
もしかしたらキリストではないだろうか？何となく普通の人とは違う、そういうものが分かり始めていたのではないだろうか。
だから「この方」という言葉を使ったんだと思うんですね。
それは恐らくこの場面だけではなくて、この男が神さまに向かって——この真ん中のイエスさまが、神さま神さまに向かって——「父よ」と祈る姿を、見ていたのではないだろうか。
34 節見ていただきますと——

34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」……

この言葉をこの犯罪人が聞いていた。
聞いている内に、「ああ、『この方』と言えるような人物なんだ、この男は」と思えるようになったと思うんです。
そして、「俺は神を信じよう」という思い、そういう気持ちになったのですね。
そしてついにそれがイエスさまへの求めとなります。お祈りです。42 節——

42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」

「イエスさま、イエスさま」と言っています。
「あなたの御国の位にお着きになるときには」というのは、ま、簡単な言葉で言うと、天国へ行くとき。
「あなたが天国に行くとき、私を思い出してください」——すごいですね。犯罪人なのに、あなたが御国でそのお位にお着きになる、ということが分かっていた。分からされていた。
こういうことが言えるような者になっていた。

そして、天国へ行くとき、「私を連れてってください」とは言わなかった（笑）。
「私を思い出してください、天国で」そういう風にお祈りしたんですね、イエスさまに直接。

するとイエスさまは言われました。43 節——

43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

「今日、あなたはわたしと一緒に天国に行って、そこに一緒にいますよ」

「大丈夫ですよ」

これも、イエスさまが息絶え絶えの苦痛の中で、絞り出すように言われたんでしょうね。

どれぐらいの距離があったんでしょうか？ 隣には声が届いたんでしょうか？ 耳を澄ませばわかる位だったんでしょうか？

イエスさまとともにパラダイスにいる。「わたしとともにパラダイスだよ」。

ちょっと脇道にそれますけれども、この「パラダイス」って、天国のことなんでしょうけれども、

私たちが地上の生涯を終えた後にいる場所、天国のことなんでしょうけれども、でもそれだけを意味しない。

よく「パラダイス」って言葉を使いますよね、天国以外の意味で。

「わたしとともにパラダイス」とイエスさまは仰る。

イエスさまと共にいれば、そこはパラダイス。

「きょう、あなたは、わたしとともにパラダイスにいます」——皆さん、イエスさまと一緒にならば、そこはパラダイスなのだ、とイエスさまは仰る。

イエスさまと一緒にならば、天国に行かなくても——もちろん天国はもっとすばらしい所なんでしょうけれども——そこはパラダイス。

今日も明日も次の日も、新年度に踏み出しますこの一週間も、今年も来年も、毎日毎日が「イエスさまと共にパラダイス」。

悩みはあります。問題課題は沢山あります。家庭の問題や職場の問題や人間関係の問題、沢山あります。

そして自分は弱いし、足りないし、病気の中にあられる方もいらっしゃいます。——私（戸塚伝道師）もそうですし——どうすることもできない状況の中にあるかもしれない。

でもそこにイエスさまがおられる。イエスさまがおられるならば、そこはパラダイスなのだ——そう信じて生きたいと思うんですね。

新しいスタート、慣れない環境、一年生、私（戸塚伝道師）も一年生（笑）。新しい気持ちで頑張りたいと思うんですけども、自分の力ではどうにもならない。でもイエスさまと共に一緒ならばパラダイス。

さて、話は戻りますけれども、二つ目の十字架にかけられたもう一人の犯罪人、イエスさまとともにパラダイスに恐らく行ったんでしょうね、イエスさまがそう宣言なさるなら。

イエスさまとともに天国に移された第一号、いいですね。うらやましいですね。

3) そして最後、3つ目の十字架です。イエスさまの十字架です。

イエスさまの十字架を仰ぎながら終わりにしたいと思います。

日本基督教団の牧師であられた藤木正三（ふじき・しょうぞう 1927～2015）先生という先生がいました。

一昨年、もう天に召されたと伺っています。

この藤木先生が「灰色の断想」（ヨルダン社、1997）という本の中に、次のような文章を書いています。

お読みいたします。題名は「恩寵」。

イエスの十字架は二人の犯罪人の十字架と共に立ちました。その一人は悔い改めて、救いの言葉を死の間に賜りました。もう一人は罪を告白せず、そのまま死にました。これは悔い改める者は救われ、そうでない者は滅びることを示しているのでしょうか？

いいえ、十字架の側では、悔い改めるも悔い改めざるも同じであることを示しているのです。悔い改めるか否かで人間の運命が決まるかのように言う、宗教的脅しに注意しましょう。人間の悔い改めなどしれているのです。

十字架が私の側に立っている、それですべてなのです。（——引用はここまで）

この文章は、藤木先生の牧会されていた京都の教会の週報に、コラムのようにして毎週載せられていたものの一つだったそうです。

ある人たち——教会員でしょうね——からは、「あ、この文章を読んでほっとする、慰められる」——そういう風に受け留められました。

しかし多くの人たちから、「悔い改めを軽視している。福音を安っぽいものにしてている。悔い改めは宗教的脅しなどではない」と厳しく批判されたそうです。

実は、この文章を書く前に、藤木先生は考えていました。

藤木先生は思ったんですね。

「十字架の両側の犯罪人の内、私はいったいどちらの犯罪人なのだろうか？ 悔い改めた方だろうか、それとも悔い改めなかった方か？」

考えている内に、「私は罪を告白しないままに死んだ悪い方の犯罪人だ」と自分を見ることにしました。

その時、藤木先生は「その悔い改めの出来ない自分の側にも、主の十字架が立っている」という事実気づいたそうです。

で、藤木先生は思ったそうです。「自分がなし得る悔い改めとは、この事実気づくことではないだろうか」と。

この事実気づくことなのではないか——これが自分のなしうる悔い改めではないだろうか藤木先生は思ったんですね。

このような聖書の箇所を読む時に、私（戸塚伝道師）はパラダイスに行った方の犯罪人に、どうしても重ね合わせて読んでしまうんですけども、藤木先生はそうではなかった。

藤木先生はこう思ったそうですね。

「もし、自分を悔い改めている良い方の犯罪人に属していると思っているとしたら、その時はいつの間にか、自分の悔い改めに自信を持っている時である。自分の悔い改めに安心している時である。つまり、悔い改めがもはや悔い改めではなくなっているのではないか？」

藤木先生はそう思ったそうです。で、この思い巡らしの結果が、先ほどの文章になったそうなんです。

で、私（戸塚伝道師）は思いました。

なぜ悔い改めていなかった犯罪人にもこの十字架は立っていたんだらうか？

なぜ藤木先生はそう思ったのか、私は考えました。

で、一つ目の十字架の上の犯罪人のイエスさまへの悪口の言葉を、39 節の悪口の言葉をもう一度よく読んでみたいと思うんですけども——

39……「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言った。

「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」——読めば読むほど、これはこの犯罪人の心の叫びに聞こえて来る。

もしかしたら、これは祈りではないだろうか？

「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」——救え！あんたキリストなんだろう。だったらそんなみじめな死に方ってあるかよお。自分を救えよお。そして俺たちを救ってくれよお。

悪口かもしれません。でも悪口が言える程の関係だった——恐らくこの聖書の箇所を記述したルカは、そのように悪口だと聞こえたのだと思うんですけれども、

でもよ〜く読むと、「あなたはキリストではないか。自分と（次に力を込める戸塚師）私たちを救え」って書いてあるんですね。

もう一人の犯罪人のことまで訴えていたんです。「私たちを救ってくれよ」

でも二番目の十字架にかけられていたもう一人の犯罪人は、自分のことしかお祈りしていなかった。

でも一人目のこの犯罪人は「私たちを救え」——もう一人の犯罪人のことまでお祈りしていた。

私（戸塚伝道師）はなるほどと思いました。

イエスさまと一緒にパラダイスに行った犯罪人は、イエスさまが救い主であるということを分かせていただきました。

しかし、イエスさまに悪口を言った犯罪人はどうだったのか？

この言葉を読むと、イエスさまが救い主であることを捜し求めていたのではないだろうか？

だから、どちらのためにも十字架は立てられていたのだ。

藤木先生の言われるように、「十字架の側では、悔い改めるも悔い改めざるも同じであることを示している」——そういう意味ではないだろうか？

イエスさまを捜し求めていたもう一人の犯罪人がいた。そして時空を超えて、今の私たちのために十字架は立てられている。

私たちはそれに気づかされた。でも私の家族、親族、友だち、知人、職場の人、出会う人、日本中の人、世界中の人、その人のためにも、イエスさまの十字架は立てられている。

神さまに望まれてこの世に生を受けたお一人お一人、神さまにとってかけがえない存在、お一人お一人のために、一人ひとりに人間の尊厳が与えられ、生かされているあの人にもこの人にも、イエスさまの十字架はすでに立てられている。

ということはですよ、すべての人は、救われる可能性があるんですよ。

あの人は天国へ行けるだろうか？あの人は大丈夫だ（笑）。
でも私たちは神さまではありませんから、そんなこと断言できませんね。
私たちには分からない神さまの領域で、あの人は大丈夫だ、あの人はダメだ、
そんなこと言えない。
誤解を恐れずに言うならば、皆さん、十字架の贖いという恵みの視点に立つ時
に、（格段に大きな声を出す戸塚伝道師）
「もうあなたは救われているんですよ」ということですよ。
この可能性に漏れる人は一人もいない。
もうあなたの罪の代価は二千年前にイエスさまの十字架で支払われているん
ですよ。

なぜこう言えるのか？それは神さまが全ての人が救われることを望んでおられ
ると聖書に書いてある。（***Ⅱペテロ 3：9、Ⅰテモテ 2：4）
神さまが私たちの生みの親ならばですよ、子どもが地獄に行くことを望む親つ
てどこにいらっしゃるでしょうか？（***マタイ 7：7～11）
だから福音なんですよ。良い知らせなんです。
良い知らせ——「あなた救われているんですよ。あなた救われているんです。
神さまからのプレゼント。これが神さまからのプレゼントですよ。どうぞ包み
を開けてくださいよ。開けるだけです、あなたはあと。気づいてくださいよ。
あなたがぶら下げているティファニーのクロス、その十字架はあなたのためな
んですよ。40万円以上の価値があるんですよ。気づいてくださいよ。」

でもなかなか気づいてくださらない。もどかしいですね。もどかしい。
「ああ、宗教ねえ。いいわあ。」（笑）気づいてくださいよ（大笑）。
キリスト教という、単なる一つの宗教じゃないんですよ。「あんたはそう思っ
ているのよね」そうじゃないんですよ（笑）。
どうしたらいいのかわかりませんね。神さまからの大きな宿題です。
「あなた救われているんですよ。早くプレゼントを開けてください。包みを開
けてください」という気持ちでいっぱいですよ。
そういう気持ちで、今日の帰りの電車に乗る時に、ああここにいる乗客に全員
に言いたくなっちゃう（大笑）。
「あなた救われている。あなた救われている。早く包みを開けて」

（しみりと）まだ信じてもない、悔い改めてもないそんな私の横にも、
私のための十字架はすでに立っていた。
そのことを高校二年生の冬、今から45年前、私（戸塚伝道師）も分からせて

いただいた。

その時ことに気づいたあの日、あの時、私は自分が救われていることに目覚めました。神さまの無条件の愛がわかりました。

信じたから分かったというんじゃない。そういう感覚じゃない。何か向こうから分らせてくださったという感覚、気づかせてくださったという感覚なんです。

自分で信じたとか、自分で悔い改めたというよりも、そういう感覚ですね。

確かにその瞬間が、私はイエスさまと出会った瞬間だった。

そしてあの時、私（戸塚伝道師）は私のためのプレゼントの包みを開けたんです。

きょう初めて教会にいらっしゃった方、いますか？

ぜひあなたにもそのことを気づいていただきたいと思います。気づいてほしいんです。

「もうあなたは救われているんですよ。救われているんですよ」

この神さまの熱い思い——ひとり子をも私たちに与えてくださったほどの熱い思いのゆえに、そして誰かの篤い篤い祈りのゆえに、私たちはイエスさまに導かれて、今ここにいます。

☆お祈り——戸塚定住伝道師

イエスさま、感謝いたします。あなたの十字架は、あなたに悪口を言った犯罪人のためにも立っていた。そしてその十字架が、こんな私の側にも立っていた。そのようなあなたの愛のみわざを、すばらしい福音を知らずにいた私です。あの日あの時、私の罪のためにあなたの十字架に気づかせてくださり、救い主であられるあなたと出会わせていただきました。心から感謝いたします。

「もうあなたは救われているんです。これがその神さまからのプレゼントです。どうぞ包みを開けてください」と語り続けたいです。受難週を来週に控えるこの時、あなたを飢え渴いて求めている多くの方々が、自分の側にも立つ十字架に気づくことができますように。聖霊が恵みをもって働きお導きください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。